慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	理性の夢 : フランス18世紀のテーマ系
Sub Title	Les songes de la raison-essai sur la thématique du dix-huitième siècle français
Author	鷲見, 洋一(Sumi, Yoichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.67, (1995. 3) ,p.186(201)- 196(191)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	七字慶紀, 若林眞両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00670001-0196

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理性の夢—フランス18世紀のテーマ系—

鷲　見　洋　一

本論文は一つのテーマを追求するものではない。あえて逆説的言辞を弄するなら，テーマの追求それ自体をテーマにした論考なのである。私がここで試みるのは一種の思考実験である。勤務する大学の図書館に収蔵されている18世紀フランスの古版本，およびその周辺のみにコーパスを限定し，どこまでも原典に問いかける形でテーマの選択と連関を考える方法である。テーマ系の設定は，当然のことながら限定されたコーパスの側からの逆規定をこうむることになるだろう。日本という文化的・地理的にフランスから隔たった環境で研究活動に従事する場合，この方法は一つの可能性と，そして当然のことながら一つの限界とを指し示すモデル・ケースとなりうるかもしれない。

I：分類への情熱

フランス18世紀に関するテーマ系の抽出に当たってもっとも頼りになる手掛かりは「分類」という概念であるように思われる。Michel Foucault が *Les Mots et les choses* の中で，古典時代を記述するに際して博物学を取り上げ，同書の第5章を「分類」に当てていることはよく知られている。確かに時代は思惟や知覚のあらゆる対象物の整理・配置・列挙を心掛けていた。17世紀末に刊行され，その後も版を重ね続けた語学事典の数々（Richelet, Furetière, Académie, Trévoux）が何よりもその雄弁な証左であろう。

ここで重要なのは，「分類」作業をもっぱら担った社会階層が「ブルジョワジー」と呼ばれる人たちだったという事実である。Richelet (1680) から

Trévoux (1771) に至る約90年間に刊行された夥しい国語辞典の版本に当たってみると，bourgeoisie という名詞に与えられている語義の多様さに驚かされる。単なる「都市の住民」は，「貴族・僧侶と区別される第3身分」としても用いられたが，「船主」，「親方，雇用主」といった財や力の保有者をも意味し，また Furetière : *Le Roman bourgeois* や Molière : *Le Bourgeois gentilhomme* に見られるような蔑称のニュアンスも帯びた。この階層が第3身分の中で「領主裁判権から自由な者」という形で王権の保護を獲得し，やがて「都市内でさまざまな特権を享受する住民」として自らを明確に都市下層民から分離するに及んで，たとえば Diderot : *Le Père de famille* や後の Mercier : *La Brouette du vinaigrier* が描くところの，商業に従事しつつ父親としての義務と愛に悩む，近代文学の曙に位置する典型的なブルジョワ像が登場する。この人々は財を蓄えるのみならず，財の枚挙と整理を心掛け，言葉から宇宙に至る一切の存在と観念を秩序づけ，森羅万象についての目録を作成しようとした。この分類熱は言語の交通整理に留まらず，人間生活の全領域にまで広まっていく。

分類の営みの中でも「網羅」や「収集」に重点が置かれたものに，各種のテーマ別事典類がある。これらの源流には17世紀の Moreri や Bayle による総合的・普遍的事典の存在を考えなければならないが，18世紀に入ってからはジャンルへの分化が目立ち，たとえば経済の分野では Noël Chomel : *Dictionnaire économique* (1732) や De la Marre : *Dictionnaire œconomique* (1768) などがある。書誌作成の努力にも目ざましいものがあり *Acta Eruditorum* (1682-1742), Jacques Lelong : *Bibliothèque historique de la France* (初版1719, 1768-1778), Herbelot de Molainville : *Bibliothèque orientale* (1697) など枚挙に暇がない。蔵書目録としては，索引付で手書きのニヴェルネ公爵文庫のもの (*Catalogue des livres de la bibliothèque de Monseigneur le Duc de Nivernois,* 1785-1798) が大きな業績になるだろう。文学の上でこれに対応するのが Angus A. Martin : *Bibliothèque universelle des romans* (1775-1789) である。また，サン・モール会による浩翰な『フランス文学史』はこの種の試みとしては史上初

めてのものであり，反宗教改革運動に棹差す，カトリックによる資料の収集と整理の優れた成果といえる。

一方，自然界の膨大な対象物をある秩序や法則の支配下に置いて系統づけようとする，より理性的な試みがある。博物学の Linné（*Philosophia botanica,* 1751）や和声学の Rameau（*Génération harmonique,* 1738）の仕事がその代表的なものだろう。この理性主義を植物や音組織のみならず，およそ考えられる限りの知の全領域にまで適用しようとしたのが，Diderot-D'Alembert の *Encyclopédie* であった。Bacon（*Advancement of Learning,* 1600）と Chambers（*Cyclopedea,* 1728）から知性の 3 能力（記憶，理性，想像力）に基づく人間知識の系統図という発想を学んだ彼らは，知についての既存の分類システムを相対化し，知識の世界の境界線を引き直したのである。『百科全書』の分類学は文字テクストのみならず，膨大な図版の世界にまで及んでいるが，同時期の科学アカデミーによる図版集 *Description des arts et des métiers*（1761-1789）や諸種博物図鑑，外国における『百科全書』の再版（とりわけスイスの De Felice による Yverdon 版と Pellet による Genève 版），そして『百科全書』の続編ともいうべき Pankoucke の *Encyclopédie méthodique*（1782-1832）などとの厳密な比較作業が今後の課題となろう。『百科全書』の分類哲学は人間知性の能力を根幹にしている以上，どこまでも人間中心的な本質を持っているが（たとえば技芸の詳述），事典の編纂・記述にさいしてその本質に抵触するような事態が生じた時，きわめて興味深い処理や表現が工夫される（たとえば本文における出版検閲への対処，図版に散見される労働現場の美化）。

II：合法化された侵犯

徹底的網羅と理性的系統化を特徴とする分類は，往々にして事物に与えられた価値の序列を転倒させ，従来光の当てられなかった対象や領域に意外な関心や発見を誘発する。たとえば『百科全書』に固有な方法の一つは，未知の世界にどこまでも分け入ろうとして容赦なく振るわれる，「分解」「切断」「侵入」などのメス捌きである。

1：解剖　合法的侵犯のテーマとして第一に挙げられるのが「解剖」である。J. -F. Gautier d'Agoty : *Anatomie de la tête*（1748）の精密をきわめた彩色図譜を一覧すれば，人体解剖図が単なる医学資料以上の意味をもっていたことが納得される。『百科全書』の項目 Anatomie を不気味に飾る動脈と静脈の血叢図や，補巻の Hermaphrodite を克明に描写した図版についても同じである。そして同時代の文学的想像力は Sade に至ってついに我が娘を生体解剖する父親の形象を生み出すのである。

2：地下の世界　理性的探究が大地を対象とした時，「鉱山」と「墓場」のテーマがえられる。もともと近代ヨーロッパ人の地中探訪への志向は，Dante Alighieri : *La Commedia* における地獄篇最終歌が描出したサタン像，Athanasius　Kircher が初めて手がけた地球内部の研究書 *Mundus Subterraneus*（1682）以来のものであるが，18世紀では溶鉱炉にコークスを大量に使用するようになった関係で石炭の需要が増し，世紀初頭から鉱山への関心は強かった。『百科全書』の図版もさることながら，たとえば Abbé Prévost : *Pour et contre* 中のスウェーデンの鉱山に関する記述などが注目される。地下の採掘現場は落盤の危険に脅かされ続ける，いわば死と隣合わせの空間であったが，当然のことながら隣接テーマに「墓場」を考えなければならない。同じ Prévost の長編 *Cleveland* に洞窟の奥深く母親を埋葬する場面があった。Mercier : *Tableau de Paris* の場合は，パリの真下に空洞があり，街は恐るべき深淵の上に建っているという恐怖が述べられている（第1巻5章，第11巻189章）。そうした地下の廃墟に理性の裏面から光を当てて，死と沈黙のたちこめる空間を描き出したのが，もっぱらイタリアで活躍した画家 Louis-Jean Desprez（1743-1804）の一連の墓所画であった。地中への探索は傍系テーマとして，「監禁」（Sade），「内面凝視」（Rousseau），などを生み出すだろう。

3：機械のメカニズム　Descartes の自然学に端を発する機械論は，理性のメス捌きがもっとも鮮やかな分野であり，La　Mettrie : *L'Homme machine* の発想に行き着く傍らで，Vaucanson の自動人形に寄り道し，さらにさまざまな形の「仕掛け」に対する強い関心を呼び覚ました。『百科全

書』の図版 Machines de théâtres に見られる詳細をきわめた舞台装置が好例であろう。この複雑怪奇なメカニズムへの偏執が想像力の暗黒部分を刺激すると，「墓場」や「監禁」と隣接した酷薄なテーマが浮かび上がってくる。国王ルイ15世を襲った Damiens の拷問用に考案された寝台と，のちに Sade が *Histoire de Juliette* で精密描写する拷問機械との間には驚くべき類似が認められる。

4：日常生活への侵犯　Turgot の有名な Paris 地図は，その巨大な版型と精密さによって，自らを書物の中の「首都」たらしめようとする意思を表明するのみならず，現実の大都市をその表層においてくまなく記述しつくそうとする執念の産物であった。高等法院弁護士 Jèze : *Etat de Paris* (1757) は，いわば言語によるパリの地図化の試みで，街路別の店舗リストや値段表などが，『百科全書』を世界地図に譬えた D'Alembert の思想に共鳴している。Bachaumont : *Mémoires secrets,* Mercier : *Tableau de Paris* などの著作は，この Jèze のマニュアルを文学の方向へと深化させたものに他ならない。

都市の日常生活への侵犯行為はさまざまである。『百科全書』の図版の多くが建物や物体の断面を示し(工場や船)，場合によっては屋根を剝いで内景を暴いてみせるのは，Le Sage の小説 *Le Diable boiteux* で悪魔アスモデが使った魔法と同じである。この方向への侵犯の目ざましい成果は「私」空間の描出であろう。Norbert Elias が分析した『百科全書』の図版「邸館」の見取図では，貴族階層における夫婦別居の実態が見事に図案化されているが，一方 Sedaine : *Le Philosophe sans le savoir* といったブルジョワ劇の脚本には，富裕な商人の家の間取りや戸締りの様子が活写され始める。「死の社会史」は家人の臨終に際して近隣からの見物客を締め出す習慣が定着しはじめたことを教えてくれる。

美術における肖像画の流行，とりわけ「読書する女」をテーマにした絵画，そして読書それ自体における「黙読」の定着，黙読による世紀最大のイヴェントともいうべき Rousseau : *La Nouvelle Héloïse* の爆発的流行，いずれの現象も公共性に対する「私性」の台頭を雄弁に物語って余りある。

5：父親・家族・教育　「理性」のカメラが「家」の内奥に分け入ってとらえる被写体はいろいろである。Diderot が創始した drame bourgeois の描き出す「父親」の美徳と苦悩の物語（*Le Père de famille*），結婚・出産・育児をめぐる女性の社会史，夥しい教育論（Locke, Fénelon, Rousseau, Condillac）と連関の系を辿ることができる。ここに見られる安定と秩序への偏執は「ブルジョワの経済的使命は道徳的使命を伴う」（R. Mauzi）という命題を支えるエネルギーにほかならない。そうしたブルジョワ劇の父親を多くの試練が待ち構えている。

6：官能の復権　17世紀に Descartes が *Les Passions de l'âme* で統御・抑制しようとした「情念」は，Diderot による復権要求（*Pensées philosophiques*），La Mettrie の賛美（*Anti-Sénèque*），Sade による絶対化（*La Philosophie dans le boudoir*）という手順で着実に市民権を獲得していく。Sade：*Aline et Valcourt* で非道の限りを尽くすリベルタンの父親は，Diderot の父親像の見事な反措定であると同時に，ある意味でその必然的展開として逆説的に捉え直すことも出来よう。この過程は時代の「侵犯志向」が人間という存在の暗部にまで及んだことの証左であると同時に，根深い禁制へのおびえから官能の衝動を隠蔽しつつ装飾化したり（ロココ文化），純然たる心理の駆け引きに転化したり（Crébillon fils を始めとするリベルタン小説），倫理機制との葛藤のドラマに仕立てたり（*La Nouvelle Héloïse*）するようなさまざまなヴァリエーションを生み出した。

7：娼婦，悲惨・貧困，犯罪・刑罰　文学史が「啓蒙主義」と「前ロマン主義」の美名の下に隠し続けてきたのが，官能の社会的形象化といえる「娼婦」，その属性である「悲惨・貧困」の現実，そして制度上の帰結である「犯罪・刑罰」のテーマ系だった。Prévost（*Manon*）から Rétif（*Le Pornographe, Les Nuits de Paris*）にいたる「娼婦文学」の系譜は，いわゆるポルノグラフィーやリベルタン小説とは一線を画されるべきである。また『百科全書』の危険かつ痛ましい労働現場を一見淡々と描いた図版（炭鉱での発破作業，ピン製造工場における幼児労働者）や，Helvétius：*De l'esprit* の脚注（Discours I, Chapitre 3）に見られる悲惨な社会的現実への告発，ある

いは農民出身の独学者 Jameray-Duval : *Mémoires* に想起された農村の貧困ぶりなどは，従来の観念的な社会思想史が，日常世界の実態に立脚した社会史の成果を知らずに，いわば蒸留水のような進歩的言説の中で倦むことなく反復してきた大思想家列伝になにがしかの生気を与えてくれるだろう。

18世紀フランスは，一方で Damiens や Calas の裁判と処刑に象徴される，厳格にしてときに不寛容な刑法装置があり，もう一方でイタリアの Beccaria の仏訳（*Traité des délits et des peines*）が物語るような寛容への広範なキャンペーンがあった（Voltaire : *Commentaire sur le livre des délits et des peines,* および Calas 事件や La Barre 事件への介入）。いずれにしても，この時代の最良の知性は，人間の情念の最深部にまで測鉛を届かせると同時に，情念の活動を陰日向で規制し抑圧する法組織の中枢に批判のメスを加えたのである。

III：秘境の発見と異界の踏査

18世紀の知性が探査の対象にした領域は身近な現実（身体，心，日常生活，社会の仕組み）ばかりではない。人々は現実社会の外側に自分たちの与かり知らぬ世界が広がっていることに気付いた時，理性と幻想，推理と空想とが奇跡のように調和した，不思議な宇宙を作り出した。

1：空へ，山へ　第一のテーマは「空を翔ぶ夢」であろう。17世紀の Cyrano : *L'Autre monde* をもって始まる宇宙旅行の夢想は，Voltaire : *Micromegas* を経て，Rétif : *La Découverte australe* では飛行人間の形象化に行き着き，一方でロジエとアルランドによる有人気球の打ち上げ（1783年11月21日）という現実化されたユートピアを生み出すに至った。アルプスの魅惑をテーマにした山岳文学にも高所への憧憬は認められる。Rousseau, *La Nouvelle Héloïse*（第１部書簡23）に色濃い現実嫌悪と無限願望はきわめて倫理性の強いものであるが，Sénancour : *Oberman*（第１年書簡７）になると山それ自体への感覚的惑溺が独自の美文で謳いあげられる。

高所願望の根底に横たわるものは，当時医療行為で重要な実績をあげて

いた「転地」や「散歩」のテーマにほかならない。都会嫌悪と現実逃避は「隠遁」や「孤独」の紋切り型を生み出したが，やがては逃避先の自然や神秘が独自の価値を持つようになる。この特権的感覚はしばしば「崇高」(sublime) と呼ばれた。Diderot のような芝居好きにとって「崇高」は最高の演劇的感動を形容する最高の表現にほかならなかったが (*Entretiens sur le fils naturel*)，世紀後半の感受性は高所と崇高とを結び付け，いわゆる「天才」概念と並んで，崇高は啓蒙時代がロマン主義に向けて差し出すもっとも聖化された贈り物になった (Burke, *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*; Kant, *Critik der Urtheilskraft*)。

2：船・旅・異国　高所志向に続いて，地表上の移動が「旅」のテーマになる。経済活動の活発化，道路・水路と交通機関の発達，治安と保護の確保，ホテルの整備といった好条件が「グランド・ツアー」の爆発的流行を生んだ。Arthur Young, *Travels* (1792年，再版1794年) は仏訳され，英国経済学者の革命期フランスに関する貴重な証言として読まれ続ける。また7年戦争の痛手はフランスに海軍の弱体を思い知らせるきっかけとなり，造船技術の進歩と改良が試みられた (*Encyclopédie* などの図版：「造船工場」「航海技術」)。Arnould の *Système maritime et politique des Européens* (1797) はその総決算といえるような書物である。

造船業の興隆に促されるようにして，新たな「大航海」の気運が醸成された。英国の Cook，フランスの Bougainville, *Voyage autour du monde* (1797)，そして Napoléon のエジプト遠征記録 *Description de l'Egypte* (1809-1823) など枚挙に暇がないが，大航海は植民地政策と裏腹の関係にあり，Diderot : *Supplément au voyage de Bougainville* がフィクションの形で提起した問題を，Raynal は *Histoire des deux Indes* で Diderot 自身の手を借りながら政治と歴史の恥部として捉えなおしたのである。　異国の発見が旅行文学の流行を促すという図式は何も18世紀に始まった訳ではない。だが Swift : *Gulliver* の仏訳が争って読まれた事例を持ち出すまでもなく，異国趣味や旅行譚への熱中は当初の韜晦や仮面の役割 (Montes-

quieu: *Lettres persanes*）を超えて，珍奇な風物や習俗との出会いそのものへの関心が高まってきたことを示している。*Voyages imaginaires, songes, visions et romans cabalistiques*（1787-1789）という大部な集成がその辺りの事情を雄弁に物語っている。Sylvain Maréchal の筆になる世界中の民族の衣装総覧 *Costumes civils actuels de tous les peuples connus*（1805），Ferraio: *Il Costume antico e moderno*（1816-1824）なども，学問的価値はさておいて，そのような好奇の視線が捉えた「他者」のイメージとして検討されるべきである。そして18世紀フランス人にとって，時代を通じての最大の「他者」とは，タヒチ人でも北米インディアンでもなく，東洋人であった。Kämpfer: *Histoire naturelle, civile et ecclésiastique de l'empire du Japon*（仏訳1729），Charlevoix, *Histoire et description générale du Japon*（1715），Thunberg, *Voyages de C. P. Thunberg au Japon*（仏訳1796）などの著作に描かれた日本人および日本の習俗は，文章と図像の両面にわたる歪曲と誠意の証しとして読むことができる。

3：博物学の時代　「分類」，「旅」，「異国」といった諸テーマの交差地点に浮かび上がってくるのが「博物学」である。異国の「他者」を対象にした記述がさまざまな偏見や思惑のフィルターを通して歪曲や変形の跡を留めるのに対し，遠隔の地に見つけた花や鳥は驚くべき正確さで写生されるというパラドックスがある。いずれにせよ，この学問の成果（Buffon から Cuvier にいたる進化論以前の夥しい博物図譜）は時代の思考様態を象徴する図案として，造形的に検討される一方，『百科全書』の知識系統図などを解読格子にその認識論的基盤を問われる必要がある。博物図譜こそは啓蒙期の「表象」哲学をもっともよく体現する資料体なのである。

4：奇形学への関心　Pope が詩に歌った「茸から神までの」階梯状をなす存在の連鎖は，啓蒙主義によって揶揄・批判されるが（Voltaire: ‹la Chaîne des êtres créés›, in *Dictionnaire philosophique*），代わって登場したのが古代唯物論の流れを汲む万物連鎖説であった（D'Holbach: *le Système de la nature*）。「百科全書」第1巻冒頭の「人間知識の系統図」に付された説明によると，「歴史」の中でももっとも重要な分野である「自然史」は「一

定不変性」,「変異」,「利用」の三領域に分かれる。現在，私達が「博物学」の名で呼んでいるのは「自然の一定不変性」の領域だが，存在の次元でも（万物流動の漸次的隣接関係によって）事典記述の次元でも（いわゆる「参照項目」の方法によって）「連鎖」で結ばれた自然物の系統的把握に「変異」という奇形を扱う項目がわざわざ別に用意されているのが面白い。神を知らぬ，言い換えれば万物の階梯状をなした秩序を知らぬ自然界では，正常と異常の全てのニュアンスが水平にして平等な隣接関係に位置付けられる（Diderot : *le Rêve de D'Alembert* に説かれる異種交配)。

天体の「異常」である「彗星」への過剰反応は Bayle が *Pensées sur la comète* で批判したところであるが，この民衆の集合心性は世紀の半ばを過ぎても定期刊行物の記事で確認できる。ちなみに Grimm が"phénomène"と形容した神童 Mozart のパリ登場と，時ならぬ彗星騒ぎとは期を一にしている（*Gazette de France,* n°. 3, 1764)。時代の文脈の中では天才と天体異常とを同じエピステーメーに組み込んで論じることが出来るのである。奇形，怪物への強い関心は，たとえば Lavater の観相学における動物と人間の表情比較，定期刊行物の奇形誕生に対する異常なこだわり，『百科全書』別巻の「半陰陽」の図版などが有力な手掛かりになろうが，同じ『百科全書』の図版「動脈系」はすでに幻想の領域に属するものであり，この線上に Cazotte : *Le Diable amoureux* の化け物，Rétif : *La Découverte australe* における動物人間の夢想が花開くことになる。

5：見果てぬ夢：ユートピア　「異常」系のテーマの先に「ユートピア」を考えることができる。このテーマは「分類」に特徴的な整合性，「旅」がもたらす異境と他者の発見などの諸要素を総合し，一つの「語り」に組み立てたもので，どの要素に強調が置かれるか次第で，そのありようは微妙に変化する。強い現実否定の意思に促されて社会改革の夢を理性の言葉で語ったのが，Morelly : *Code de la nature* (1755) であり，Rousseau, *Du contrat social* (1762) であった。だが，その限りでの思想家や作品は18世紀社会思想史がくどいほど繰り返してきた常套句の垢にまみれている。それに対して，音楽（Rameau : *Génération harmonique,* 1738)，建築

(Ledoux, Lequeu, Boullée の図版)，言語（理性的言語体系図表)，図案（『百科全書』図版などに散見される時計仕掛け，絹織物，アトリエ内景の幾何学模様）などのジャンルに見られる調和と整合への異常ともいえる強い嗜好をもまた「ユートピア」と呼ぶことが出来るのではないだろうか。

いわゆる「ユートピア文学」が「島」を好んで舞台にしたことは知られている。Marivaux : *L'Ile des esclaves* (1725) ではたんなる身分転倒の口実的空間だった島が，Sylvain Maréchal : *Le Jugement dernier des rois* (1794) になると王殺しの祝祭空間に変容する。時間の変容が主題となる「ユークロニー」も見逃せない。Mercier : *L'An deux mille quatre cent quarante* (1771) の現実性を論じるのに，私たちはあと450年近くも待たなければならないのである。